

先週はアメリカ合衆国大統領選挙の投票日でした。選挙戦では新型コロナウイルスの対応を筆頭に、様々な争点が話題になりました。その中でも今年には人種問題、特にブラック・ライヴズ・マター（B L M）運動に大きな注目が集まりました。今回はこのB L M運動について考えていきましょう。

B L M運動が今年再燃した発端は、5月25日にミネソタ州ミネアポリス市で黒人男性ジョージ・フロイド氏が白人警官に殺害された事件でした。この事件を契機に全米の各都市だけでなく、世界中で抗議運動が起きました。B L M運動は黒人を暴力的に取り締まる警察や、黒人の命が簡単に奪われてしまうアメリカ社会そのものに対する意義申し立てなのです。

ブラック・ライヴズ・マター運動を 考える

みなさんはこのB L Mがどのように始まったかご存知でしょうか？ 2012年2月、17歳の黒人少年トレイボン・マーティン君が、自警団のジョージ・ジーマン氏に射殺されるという事件が起きました。この事件に対して2013年7月13日にジーマン氏の無罪判決が出ました。これを受けて、活動家のアリシア・ガーザ氏がフェイスブックに「黒人の命が軽んじられることへ驚く」と同時に「黒人の命を諦めないで」と投稿しました。これに対してガーザ氏の友人で活動家のパトリス・カラズ氏が #BlackLivesMatter というハッシュタグをつけて返信すると、“Black Lives Matter”という言葉はSNSを中心に瞬く間に広がっていきました。その後コミュニティ・オーガナイザーのオパール・トメティ氏と共に3人はB L Mを立ち上げて活動を続けています。こうして黒人女性3人によって生まれたB L M運動は強力な指導者がいるわけではなく、各地で緩やかに連帯した脱中心的な運動と言えます。今年のB L M運動は、これまで繰り返されてきた警察の暴力へ抗議を続けていた中でフロイド氏殺害事件を受けて、大きなうねりとなってアメリカ社会に問いかけたのです。

現在、B L M運動には若者を中心に様々な人種や国籍の人々が参加しています。フロイド氏の事件以降、日本でも東京、大阪、名古屋など各地でB L M運動は起こりました。日本でも他人事ではない問題として捉える動きが、少しずつですが出てきています。B L M運動はこうした活動を通して人々が学び、状況を改善する可能性を秘めています。全米オープンで優勝した大坂なおみ選手が犠牲者の名前入りのマスクをして抗議の意思を示したことは有名です。彼女は「当事者として一人一人が考えてほしい」と訴えました。みなさんもこの問題について考えることから始めてみませんか？